二

磐音がまず向かった先は、六間堀を北に下った北の橋詰の「鰻蒲焼　宮戸川」と看板がかかった小体な店の裏口だ。裏木戸を開けると、鰻割きの松吉と次平じいさんが井戸端でまな板を洗う片付けをしていた。

「おっ、珍しい人が面を出したぜ」

松吉が言うと、

「親方」

と鉄五郎を呼んだ。

「長いこと留守をいたして申し訳ござらぬ」

磐音が腰を折って頭を下げると、

「親方がっぼやきどおしだ」

と松吉が笑った。

そこへ豆絞りの手拭いで権太巻きにした親方の鉄五郎が姿を見せて、しばらく磐音を見ていたが、ゆっくりと破顔して、

「なんだかな、今朝方、妙に胸騒ぎがしてたんだ。よう、帰ってこられましたな」

と笑いかけた。

「親方、相済まぬことでございました」

「豊前小倉から丁寧にも手紙を頂戴して、おこんさんとさ、苦労していなさるようだと話していたところでね。なにはともあれ、嬉しい限りだ」

「早速じゃが、親方、昔どおりに使っては貰えぬか」

「あっしはまた断りに来られたかと心配しましたぜ。うちは明日からでもいいや」

「ありがたい」

「どうですね、久しぶりにうちの鰻を食べていくってのは」

「ありがたいが、そうもしておられぬ。いずれ親方に相談もいたすが、今日はご挨拶にござる」

「痛み入ってござる、と坂崎さんに返したくなるね」

鉄五郎が嬉しそうに冗談口を叩き、

「なら、明日の仕事が終わったら、うちの蒲焼をしっかりと食べて旅の疲れを落としなせえ」

と急ぐ磐音を裏木戸から送り出してくれた。

次に訪ねたのは、北割下水の貧乏う御家人の次男坊、品川柳次郎の拝領屋敷だ。かなり傾きかけた門を潜ると、師走の日差しに柳次郎は母親の洗い張りを手伝っていた。

「ようやく帰ってこられましたか」

紅の扱き帯で襷がけにしていた柳次郎が笑いかけ母親の幾代が、

「坂崎様はご帰参と思うておりましたのに」

と残念がった。

「母者のご期待に添えずに申し訳ございません」

逃れる口実ができたとばかりに柳次郎が屋敷に走って、外出の仕度をしてきた。とはいっても、女ものの扱き紐を外して着流しの帯に大小を落とし込めば仕度がなかった。

二人は早々に北割下水の屋敷を出た。

「近頃、仕事はどうです」

「時折り今津屋が仕事をくれるので、なんとか糊口を凌いできました」

「昨日、今津屋に寄ったら、師走の間は交替で店に詰めてくださいと、由蔵どのに頼まれましたよ」

「最近一匹狼の押し込み強盗が流行っていますからね。それにしてもさすが坂崎さんだ」

柳次郎が喜びの声を上げた。

磐音の足は、北割下水から大川に架かる吾妻橋に向かっていた。

「奈緒どのと会えましたか」

磐音は道々、小倉以来の話をした。

「なんと坂崎さんの話は波乱万丈だ」

呆れたように言った柳次郎が、吾妻橋から御蔵前通りに出て、

「まさか、坂崎さん、これから吉原に乗り込もうという算段じゃないでしょうね」

と訊いた。

「駄目ですか」

「吉原に上がるにはちと刻限も早い。それに……」

と洗い晒した合わせの袖を引っ張った。

「吉原に参るといっても、女郎衆のところに行くわけではない。第一、そんな金子はどこにもありません」

「もっともな話だ」

二人は山谷堀の今戸橋にぶつかり、日本堤を師走の吉原へと向かった。

昼前の刻限だ。

ちょうど遊女たちが起きる巳の刻にあたり、二階廻しが朝湯触れを部屋部屋にかけて回る時刻にあたった。

土手八丁とも呼ばれる二本堤の往来ものどかで、山谷堀に荷船が往来しているくらいだ。

「となると、どこに行かれるのですか」

「会所に四郎兵衛どのを訪ねるつもりです。そのあと、久しぶりの再会ゆえ、どこぞで昼餉など食しましょう」

「四郎兵衛会所か。いきなり行って会ってくれるかな」

と柳次郎が首を傾げた。

「それが知り合いでしてね」

磐音は種明かしをした。

「ああ、あったな。損な話……」

柳次郎が納得して二人は衣紋坂を下り、大門を潜った。

目指す四郎兵衛会所はすぐ右手だ。

磐音が四郎兵衛に会いたいと若い衆に訪いを告げると、しばらく待たされた後、奥へと招じあげられた。

「坂崎さん、おれは会所の奥に上がるなんて初めてですよ」

柳次郎が興味津々に呟く。

坪庭に面した奥座敷に当代の四郎兵衛が控え、吉原会所の半纏をいなせに着た三人の手代衆と打ち合わせをしていた。

「坂崎さん、その節は世話になりましたな」

「こちらこそ迷惑をかけました」

短い挨拶が終わり、今日はどうなされたと四郎兵衛が訊いた。

「ちとご相談があって参りましたが、ご談義の最中なれば、待たせていただきます」

「里のことにございましょうな。ならばお話しなされるがよい。ここにいるのは腹心の者ばかりです」

すでに坂崎磐音の人柄を承知している四郎兵衛が許した。

「なれば、お話し申します……」

磐音は藩名だけを隠して、自らが享受した運命と奈緒の変転のおよそを語った。

長い話を身じろぎもせずに聞いていた四郎兵衛は、

「まことにもって驚き入った次第にございますな」

と嘆息した。

「私も生まれたときからこの里で住み暮らしてきました。遊女の身売り話など耳にたこだ。ですが、肥前長崎から豊前小倉、長門の赤間関から京の島原、さらには、騙られたとはいえ、加賀百万石の金沢と、まるで何百里も双六の上がりのように流転した遊女など知りませぬ。それも破格の千両の値とは……」

四郎兵衛の視線が、黙したまま話を聞いていた手代たちに向けられた。

「たれぞ承知か」

壮年の手代が仲間の二人の顔を窺い、二人は顔を横に振った。それを確かめた手代が、

「四郎兵衛様、さような話、未だ聞いたこともございません」

と丁寧な口調で答えた。

「坂崎様、会所は二万余坪、遊女は三千人の出入りから暮らしぶりまでおよそは把握しております。ですが、大所の見世によっては新たに売り出す遊女に趣向を凝らすために仕掛けを考えているところがあって、そのときまで極秘にしているかもしれませぬ。少しばかり時間を貸してくだされ、調べて差し上げます」

と答えた四郎兵衛が、

「坂崎様、年寄りのお節介にございます。気を悪くなさらずに聞いてください」

と断った。

「なんなりと」

「もしこの吉原に奈緒様が未売名されているとしたら、どうなさる」

「それがし、朴念仁ですが、かような里の習わしは承知しているつもりにございます。奈緒どのがこの吉原で生き抜こうというのなら、それも宿命にございます。それがしは、里の外からその身をそっと案じて見守ります。ですが、奈緒どのが吉原からいつの日か抜け出たいと申すのなら、それがし、なんとしてもその金子を作りたいと思うております。そのために四郎兵衛どののお知恵を借りたいと参じました。

「よう申された。それでこそ、この四郎兵衛も動きようがある。坂崎様、まずは、奈緒様がすでに里に入っておられうかどうか、調べましょう」

磐音は黙って頭を下げた。

磐音と柳次郎の二人は黙したまま、切り取られた株が並ぶ浅草の田圃の畦道を浅草寺へと抜けた。

「坂崎さん」

と柳次郎が言いかけた。

「奈緒どののことなればもうよい。四郎兵衛どのに申し上げたのがそれがしの気持ちのすべてです。あれの他にはありません」

重い息を肩でついた柳次郎が、

「切ないな」

と呟いた。

「品川さん、今日はなにもかも忘れて、なにか美味いものでも食べましょう」

「そうですね」

「浅草界隈でわれらが入れる店をしりませんか」

「並木町に豆腐を鍋仕立てで食べさせる店があります。むろん夕刻になれば酒も出します。根岸の笹の雪、両国の泡雪ほどではありませんが、気さくな豆腐屋です」

「そこに行きましょう」

二人の足は並木町へと急いだ。うまい具合に暖簾を上げたばかりの刻限で、二人は入れ込みの座敷に向い合って座った。

「私が母上の手伝いで日を送っている間に、坂崎さんは西国路から山陰、若狭、北国上街道、下街道、さらには中山道と、大変な旅をしてこられたわけですね」

「その甲斐もなくこの場に座っているが」

「いや、それは違う。奈緒様にはいつの日か、坂崎さんの気持ちが通じるときがきます」

磐音は、奈緒が行く先々で画文をしたためた扇を老いていたことをだれにも話していなかった。それは奈緒と自分だけに通じる細い細い糸だと考えていたからだ。

「ともあれ、よう戻ってこられました」

向かい合った友は改めてそう言った。

二人は湯豆腐仕立ての小鍋で飯を掻き込み、磐音は思わず、ふうっ、と満足の息を吐いた。

「長崎、今日といっても、食べ物の味は江戸が一番だ」

磐音が二人分の飯代を払い、外に出た。

「ちと早いが今津屋を訪ねてみましょうか」

「竹村の旦那はどうします」

「まずは由蔵どのと打ち合わせをしましょう」

二人は御蔵前通りを南に早足で下った。

浅草橋を渡ると両国西広小路の朝市は終わった様子で、小売の商人たちが箒で掃く土埃が上がっていた。

今津屋の前では小僧の宮松たちが水を打っていた。

「坂崎様に柳次郎さんだ」

宮松が竹柄杓を手に声をかけてきた。

「老分どのはおられるか」

「はい、帳場格子の中で睨みを利かせておいでです」

宮松が小声で言った。

今津屋の店先は相変わらず銭を一分金や小判に交換する小売商や、金銀相場の清算をする者、為替を頼む客などで込み合っていた。

「おおっ、早々にこられましたか」

主の代理として店を任された老分が眼鏡越しに磐音と柳次郎を見た。

「ちと早かったかな」

「なんの、早いということはございませんよ。品川様はいつもの小部屋で待機していてくだされ」

すぐに仕事の態勢に入ることになった。

「それがしは、いかがいたそう」

「坂崎様には呼び出しがかかっております」

「どなたからですか」

「南の大頭様がお待ちかねです」

「笹塚様は早やそれがしの帰府を存じておられますか」

「昨日の押し込みの一件ですよ。今朝方、報告を受けられた年番方与力様から、坂崎が帰っておるなら南まで顔を見世よ、とのお指図にございます」

笹塚孫一は南町奉行所の与力二十五騎同心百二十五人を束ねる年番方与力だ。小さな体ながらその首の上には頭みそが詰まった大頭が乗っていた。

この切れ者与力と磐音は昵懇の間柄であった。

「ご挨拶に伺おうと思っていたところにございます」

「ならばこの足で言ってらっしゃい」

由蔵に勧められるままに今津屋の用心棒を柳次郎に任せた磐音は、米沢町から旅人宿が剣を並べる馬喰町、さらには小伝馬町と、江戸との再会を楽しむように見回しながら歩を進め、十軒店本石町の辻で二本橋川に架かる日本橋へ出た。

橋の下では御用の船や荷足舟、猪牙舟や漁師舟などが忙しげに往来していた。

そして、気の早い凧が江戸の空に浮かんでいた。

東海道の店々の繁盛ぶりを目に留めながら尾張町の辻で西へ、お堀に架かる数寄屋橋を渡れば、南奉行所だ。

月番の南町の大戸は大きく開かれていた。

門番に笹塚孫一への訪いを伝えると、しばらく門前に待たされた末に玄関番の見習い同心に案内されて、年番方与力の御用部屋に通された。

「遅いではないか」

笹塚はいきなり言った。

「いろいろとございまして」

「今津屋の老分からそなたの苦労は聞き及んでいた。だがな、そなたが江戸を留守にいたすものだから、まだ暖簾を上げているうちから押し込み強盗が頻発するようになった」

書類に埋もれた笹塚孫一はまるで磐音が町奉行所の雇い人であるかのように言い、

「早々に手柄を立てたようじゃな」

と昨夜の一件を持ちだした。

「手柄というほどのことではありませぬ。出会い頭に押し込みどのとぶつかっただけにございます」

「押し込みどのときたか。だがな、一匹狼の押し込みは血に飢えた遣い手だぞ。そんな悠長なことは言っておられぬ」

「これまで何軒の被害がございますので」

「およそ二月前から京橋組、浅草組、本所組に所属する両替商が、夕まぐれ、疾風のように入ってきた押し込みに襲われて、番頭一人と手代二人が斬り殺され、一人がまだ生死の境をさ迷い、強奪された金も四百両近くに及んでおる」

「なんと……」

「それだけではない。こやつが暗躍してあっさりと大金を盗んでいきおるものだから、真似する者があとを絶たぬ。そなたが手捕りにした三人組もその一つだ」

「一匹の狼の押し込みはどのような人物なのですか」

「若い。年は二十そこそこという者もいる、いや、もう少し年上と証言する者もいる。背丈は五尺五、六寸、細面で細身だ。すこぶる美形の男でな、どうやら居合いを遣うらしい。どこでもいきなり店に入ってくるなり、帳場に飛び上がりざま、驚いて立ち上がった番頭を抜き打ちに倒しておる。あまりの迅速と非情に店の者が竦んでいるうちに、悠々と銭箱から大金を摑み盗んで逃走する。あっという間の早業だそうな」

「両替商などの大店は自衛の策を講じておられぬのでございますか」

「この者に襲われた浅草広小路の両替商、讃岐屋五右衛門方では、近くの町道場から門弟衆を用心棒代わりに雇っておった」

「どうなりました」

「悲鳴がしたのでおっとり刀で店先に飛び出した町道場の師範代の首筋を、鮮やかな一撃で仕留めて逃げおったわ。さよう、この者も死人の数に入れぬといかぬな」

と笹塚孫一が言った。

「師走に来て、雑魚どもがこの一匹狼の真似をしよる。だがな、雑魚は、一匹狼を捕縛いたさば自然と消える。なんとしてもこの若僧を捕らえたいものだ」

磐音は、ただ頷いた。

「それがしがそなたの帰りを待ち望んでいたわけが分かろう」

「と申されましても、それがしは町奉行所の同心ではありませぬ」

そう申すなと聞き流した笹塚が、

「小倉藩からどちらをうろつきおって、かように帰府が遅れたな」

と訊いた。

磐音は、今津屋や品川柳次郎らに話した経緯を再び語った。

「なんとのう、そなたには騒乱の相があるようじゃな」

と言った笹塚は、すでに吉原の四郎兵衛に会ったかと呟くと、よし、と大きな声を張り上げた。

「そなたは、南に与して一匹狼を捕縛せよ。その代わり、奈緒どのの一件、どうなるか知らぬがこの笹塚が一肌脱ごうではないか」

磐音は都合のよい申しでに聞き返した。

「小役人に千両もの金はない」

「吉原が町奉行所の支配下にあるのを承知か」

と訊いた。

「そういえば、大門のかたわらに面番所がございましたな」

「町奉行隠密廻りの与力、同心が昼夜交代で詰めておる」

ということは、年番方与力笹塚孫一の支配下の者が吉原に常駐していることになる。

「吉原は幕府が公許を庄司甚右衛門に与えて以来、会所に自治を任せてきた。だがな、今も町奉行所の管轄下にあることに変わりはない」

笹塚は一匹狼の押し込みを捕まえれば、奈緒の面倒を見ようと言っていた。

「手練れとなれば、昨夜のような手捕りは難しいやもしれませぬね」

「そのときは斬り捨てよ」

と大頭が平然と言い放った。

「そのような者に新玉の年を迎えさせてたまるか。分かったな」

「奈緒どののこと、よろしくお願い申します」

磐音が頭を下げて、南町奉行所の切れ者与力と磐音との同盟がなった。